資料館 × 埋蔵文化財調査センター

平成27年度 特別展

加賀藩 与力
武士のほまれ

金沢大学資料館

平成27年度資料館特別展　ごあいさつ

金沢大学は今年で創立66年を迎えたが、現在のキャンパスの下には縄文時代までさかのぼる様々な歴史が隠されていた。その歴史を明らかにする遺跡や遺物が、1997年に金沢大学に埋蔵文化財調査センターが設立されて以来、同センターによる発掘調査により明らかにされてきた。例えば、角間キャンパスでは縄文時代及び古代から中世の遺跡が発掘されており、非常に貴重な遺物も発見されている。今回の特別展では、数多くの貴重な出土品から、特に医学類・附属病院のある宝町地区及び保健学類のある鶴間地区の遺跡の遺物を中心に展示を行う。

この度の特別展を通じて、金沢大学の基礎が築かれつつあった江戸時代の華やかな加賀の文化の一端に触れるとともに、はるか縄文時代に北陸の地を拓いていった人々に心をはせていただきたい。

最後に、本特別展の開催に、全面的な御協力をいただいた埋蔵文化財調査センター長はじめ、センター職員の皆様に御礼申し上げる。

金沢大学資料館長
奥野 正幸

金沢大学埋蔵文化財調査センターは、学内に遺跡が発見されたことを機に1997年6月に学内共同利用施設として設置され、本年で19年目を迎えた。数か月を要する野外での考古学的な遺跡発掘調査、さらに時間のかかる遺物整理や報告書作成などの室内作業のみならず、工事予定地に遺跡があるかどうかの確認調査や工事進行中の立会い調査も行っている。

角間キャンパスでは2地点で調査が行われ、縄文時代と古代から中世の寺院関連遺跡が発見された。なかでも越州窯の水注の出土は、国内でも数えるほどの例しかない。このことから、地域で重要な役割を担っていた寺院であることが推測される。角間での、この重要な寺院跡の発見は、この地が昔から学問の府であったことを想わせる。

校舎や病棟の開発計画が進められた宝町キャンパスでは17地点、鶴間キャンパスでは3地点の発掘調査が行われ、武家地と寺院、金沢監獄の跡を調査した。宝町遺跡からは、武家屋敷跡が絵図のままに明らかとなった。隣接する経王寺と如来寺の、昔の広大な寺域も明らかになった。鶴間遺跡では、明治時代の先進的な建築であったレンガ造りの監獄基礎が姿を現し、その特殊性が注目される。宝町キャンパスや鶴間キャンパスでは現在も金沢大学が歴史を書き加えており、江戸時代から明日につながる形成中の遺跡である。

今回の特別展『武士のほまれ』では、埋蔵文化財調査センターが行ってきた調査から、江戸時代の宝町遺跡と鶴間遺跡の遺物を中心に展示する。宝町遺跡の与力町と鶴間遺跡の下屋敷に住んでいた人々の生活は、加賀の文化を継承する豊かなものであったことを再確認したい。

最後に、今回、特別展の機会をいただけたのは、奥野正幸資料館長のご高配によるところが大きい。奥野先生は昨年度まで埋蔵文化財調査センター長の任におられたため、埋蔵文化財調査センターの業務に高い関心を寄せて下さっている。調査成果の一部をこのような形で発信できることに、深く感謝申し上げる。また、資料館職員の方々にも、多大なご協力をいただいて展覧会を開催する運びとなった。ここに御礼申し上げる。

埋蔵文化財調査センター長
足立　拓朗

金沢大学医薬保健学域の前身校と附属病院についての年表

西暦	和暦	出来事
1875	明 治 8 年	金沢病院を県立の石川県金沢病院に改称。
1894	明治27年	第四高等中学校医学部を第四高等学校医学部と改称。
1901	明治34年	第四高等学校医学部を分離し，金沢医学専門学校とする。
1905	明治38年	石川県金沢病院は，小立野に新築移転。
1912	明治45年	病院横に校舎（本館，生理，衛生，細菌，薬物，医化学教室等）が竣工、移転。
1922	大正11年	石川県立金沢病院を官立移管し、附属医院とする。
1923	大正12年	金沢医科大学と改称。附属医学専門部と附属薬学専門部を設置。
1949	昭和24年	国立の金沢大学医学部を設置。 金沢医科大学・附属医学専門部を附属病院・附属看護婦養成施設とする。
1963	昭和38年	校舎を新築。
1966	昭和41年	医学部実験研究棟及び解剖棟の新築。
1968	昭和43年	医学部校舎第2期工事竣工。
1969	昭和44年	医学図書館竣工。
1978	昭和53年	動物実験施設棟竣工。
1998	平成10年	宝町遺跡病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点（KTB9801）、 宝町遺跡包み込みの森98地点（KTB9802）、 宝町遺跡中央設備室地点（KTB9803）、鶴間遺跡校舎Ⅰ地点(KTH9800)
1999	平成11年	宝町遺跡病棟Ⅱ地点（KTB9904）、宝町遺跡医学部グラウンド地点（KTB9905）、 宝町遺跡精神科病棟Ⅱ地点（KTB9906）、宝町遺跡地下油槽地点(KTB9907) 鶴間遺跡校舎Ⅰ基幹整備・校舎Ⅱ地点（KTH9901）。保健学類4号館竣工。
2000	平成12年	保健学類3号館竣工。特高受変電室オイルタンク槽竣工。
2001	平成13年	宝町遺跡受水槽地点（KTG0108）、宝町遺跡中央設備室Ⅱ地点（KTB0109） 鶴間遺跡校舎Ⅲ地点（KTH0102）。　病棟完工。医学類受水槽竣工。
2002	平成14年	保健学類5号館竣工。中央設備室完工。 宝町遺跡中央診療棟地点（KTB0210）、宝町遺跡解剖実習棟地点（KTB0211）
2004	平成16年	国立大学法人金沢大学と改称。中央診療棟竣工。
2005	平成17年	宝町遺跡医学部立体駐車場地点（KTB0512）
2006	平成18年	医学類Ｇ棟、立体駐車場、病院渡り廊下竣工。 宝町遺跡渡り廊下地点（KTB0613）、宝町遺跡外来診療棟地点（KTB0614）
2007	平成19年	医学部棟の総合改修工事完了。
2008	平成20年	3学域・16学類への再編。外来診療棟竣工。 宝町遺跡つくしんぼ保育園地点（KTG0815）
2009	平成21年	宝町遺跡総合研究棟地点（KTG0916）
2010	平成22年	つくしんぼ保育園竣工。
2011	平成23年	宝町遺跡医学系図書館増築地点（KTG1117）
2012	平成24年	医学類Ｃ棟竣工。
2013	平成25年	医学図書館増築部竣工。

江戸時代の宝町キャンパス

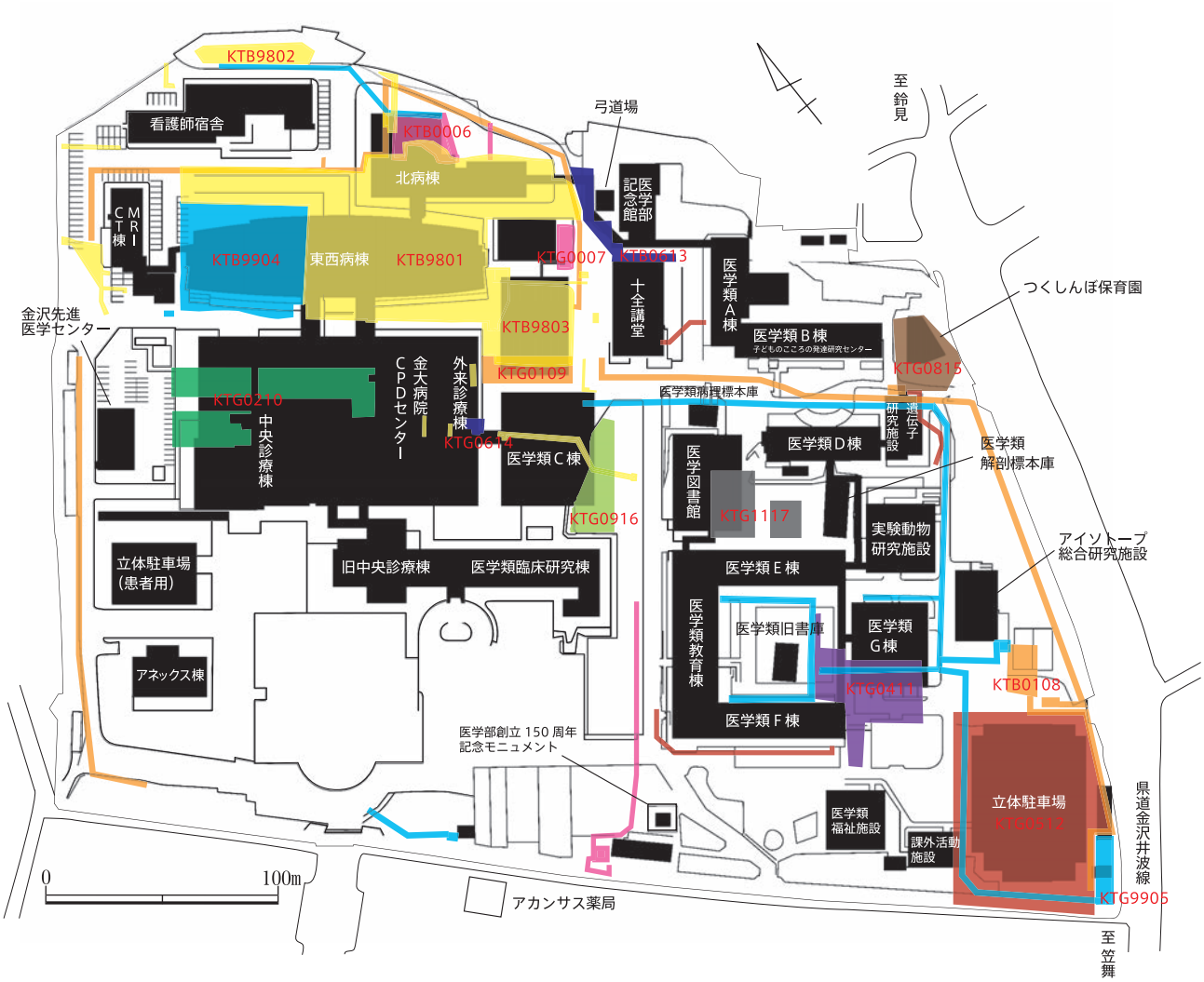
宝町キャンパスの辺りでは、今でも町会に「与力町」という呼称を使っている。かつて畑地であったここは、17世紀後半に加賀藩与力の居住地と定められた。発掘調査により、絵図にある通りの町並みが明らかになった。与力は多岐の仕事をしていたが、参勤交代の際に同道した加賀藩与力の記録では、300石以上の俸禄を得ていたようだ。与力町の人々の生活は、出土した遺物からもその生活の一部をのぞくことができる。繊維品や紙、木製品などは、保存条件に恵まれない場合が多いため、発掘調査で出土する量はごく限られる。それに引き換え陶磁器は、長く土中にあっても腐敗しないため、生活で廃棄された全ての品が遺物として出土する。この陶磁器の組み合わせを研究することにより、当時の人々の生活の様相がかなり明らかになる。

遺跡から茶道具の出土が多いのは、加賀藩の文化奨励策が行き届いていたことを裏付ける資料である。ままごと道具や碁石などの遊具からは、当時の遊びが現在にも通じていることがわかる。一般的な食器と神仏関連の品や化粧道具などからは、人々の日常生活を知ることができる。中国製染付皿や当時は特殊な品であった鍋島焼染付皿が組で出土したことは、大いに注目すべきことである。また、再興九谷焼の製品が非常に多く出土し、これから再興九谷焼諸窯の金沢における流通の様相を知ることができる。

宝町キャンパスは、与力町とともに経王寺と如来寺の寺域を含む。道路を隔てて現存する経王寺と如来寺は、かつては広大な寺域があり、発掘からそれぞれの寺の周囲にめぐらせた溝が見つかった。いくつもの江戸時代の絵図にはこの2つの寺が描かれているものの、手書きであるために縮尺や位置は正確ではない。発掘調査により溝が発見されたことで、地図上に江戸時代の両寺の正しい位置を与えることができた。また、大学敷地にはそれぞれの寺の墓域が含まれていたため、墓穴と多数の副葬品が出土した。当時の葬送儀礼を知る民俗資料として研究を進めている。

明治末年に、金沢大学の前身となる病院や医学校がこの地に置かれた。与力の住宅地と寺域は整地され、いままでとは性格の異なる医療機関として一新した。一帯が一気に開発されたおかげで昔の人々の生活を語る遺物がタイムカプセルのように区分され、彼らの生活の様子をより明らかにすることができるようになった。

つくしんぼ保育園地点で発見された経王寺の周溝



【1998年度】
病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点（KTB9801）
包み込みの森98地点（KTB9802）
中央設備地点（KTB9803）

【1999年度】
病棟Ⅱ地点（KTB9904）
医学部グランド地点（KTG9905）

【2000年度】
精神科病棟Ⅱ地点（KTB0006）
地下油槽地点（KTG0007）

【2001年度】
受水槽地点（KTB0108）
中央設備室Ⅱ地点（KTG0109）

【2002年度】
中央診療棟地点（KTG0210）

【2004年度】
解剖実習棟地点（KTG0411）

【2005年度】
立体駐車場地点（KTG0512）

【2006年度】
渡り廊下地点（KTB0613）
外来診療棟地点（KTG0614）

【2008年度】
つくしんぼ保育園移転予定地点（KTG0815）

【2009年度】
総合研究棟地点（KTG0916）

【2011年度】
医学系図書館地点（KTG1117）

宝町キャンパス調査地点

再興九谷の窯

江戸時代後期から、各藩では殖産興業策の一つとして窯業に注目している。これは日常品として必要不可欠である磁器生産を肥前の有田が独占しており、磁器購入資金として流出する膨大な藩金を止めるための策である。加賀藩でも城下の春日山窯で窯業の再興を試みるが、翌年の金沢城の火災で財政が厳しくなり計画は頓挫した。代わりに江沼地方の若杉窯が間もなく官営となり、後の八幡窯とも日常品を主に量産し成果を上げた。様々な装飾技法が生まれ、技術は今日の九谷焼に続いている。

この再興九谷の製品は、日本海交易で北海道までもたらされている。しかしながら、有田の生産に勝つことはできず、流通はごく限られたものであった。一方、加賀藩内での発掘調査出土品から、地元では大量に使用されていたことを知ることができる。大学内でも多種出土し、研究のまだ進んでいない再興九谷製品の問題を、消費地から考えるのに役立つ重要な資料となっている。

春日山窯　染付碗・色絵碗

殖産興業の奨励策により、京都の陶工青木木米を招請して文化3年（1807）に卯辰山の瓦窯を利用して始められた再興九谷の最初の窯である。「金城」「金城文化年製」「金府」「春日山」などの銘が知られており、市内の遺跡からも出土している。陶器も磁器もあり、日常雑器から茶道具といった嗜好品まで多種多様の製品が知られている。大学内遺跡からも茶席で使えそうな陶製の手付き鉢や、日常に使われたであろう磁器製の煎茶碗などが出土している。

文政元年（1818）頃には廃窯になり、短期間の焼成であったことがわかる。

若杉窯　染付碗

春日山窯を引き継いで藩窯となり、天保7年（1836）に火災で焼失し、隣村の八幡に移るまで焼成していた。

無銘のものが多いが、「左若」と言われる篆書体の「若」を裏銘や見込みに記すことがある。日常品の生産が主であり、碗や皿などのほかにも多種多様の製品をつくった。学内出土品は茶碗が多いが、染付火入れも出土している。貫入が多く胎も軟らかい出土品を見ていると、量産品であることがよくわかるが、中には手の込んだ絵付けの品もある。

若杉窯　暦手茶碗

器面に暦が書かれた碗で、正月の初釜に使われたといわれるが、茶会記には見られない。学内からは染付や色絵の碗が出土している。小松の八幡窯発掘調査でこの茶碗が出土して、生産された窯が明らかになった。この碗は「文政2年」と記されており、正月用の縁起物であるならば、文政元年（1818）に生産されたことになる。この年号から、窯が焼失して隣村の八幡に移る前の、若杉時代の製品であることがわかった。

暦手茶碗の出土例は限られており、全国でも陶製の京焼や磁器製の姫路の東山焼と九谷の若杉・八幡窯の製品が知られている程度である。

注目の出土品

木製品

一般的に漆製品は土中で木質部が腐敗し、皮一枚となった漆膜のみが発見される場合が多い。盆や厨子、文箱など発見されたが、断片であったり漆塗膜のみの状態であった。

この漆椀はめずらしく良好な状態で見つかった。蓋の上面に巫女舞で用いる扇面と鈴の金彩を施し、内面には烏帽子と見える金彩がある。

下駄の出土も多い。漆塗りのもの、男物や女物、子供用も見つかる。また、焼印のある樽や桶の木片も出土する。保存状態から出土品の器種は限られるが、当時の生活の中で多様に木製品が使われていたことは想像に難くない。

有田焼　染付芙蓉手皿

17世紀初めに磁器生産を始めた有田の製品は、19世紀に瀬戸で磁器生産が始まるまで市場を独占していた。17世紀半ばにヨーロッパ向け輸出が盛んになると、この芙蓉手皿のように、中国のデザインを模倣しつつ独自の文様を加えて発展していった。1670年ごろに有田で焼成されたこの皿は、世界中の遺跡で発見されるほどに広く流通した。輸出用の製品であるが国内の遺跡からも度々出土することが知られており、斬新な文様として国内でも好まれたであろうことがわかる。

鍋島焼　染付幾何文皿

鍋島藩の藩窯で、17世紀に開窯し19世紀の廃藩置県まで続いた窯である。藩主鍋島公が用いる品だけでなく贈答用品も作られ、藩内の他の窯とは異なる高級磁器を生産していた。主に食器類を生産したが、器面の文様は他窯に模倣を許さず、鍋島焼独自の特徴的な作風を展開した。

本品は染付７寸皿で、周辺部に精緻な幾何文をめぐらせ中央部を白抜きにするといった洗練された図案から、18世紀初めから前半の製品と考えられる。外面に七宝つなぎ文を入れ、高台外側に櫛目文があるのも鍋島焼の特徴である。

同じ土坑から破片が大量に出土し、10枚ほどの組皿を粉々に打ち捨てたようであった。与力住宅地からの出土であり、鍋島藩から贈られた加賀藩の重鎮がさらに下賜したものではないかと想像される。

（写真は、出土品の復元画像）

大学時代の宝町キャンパス

宝町キャンパスには医学類と薬学類、そして附属病院が置かれている。附属病院の前身である石川県立金沢病院は、明治38年にこの地に新築移転している。さらに明治45年には、医学類の前身である金沢医学専門学校が新築移転している。大正11年に県立病院は附属病院となった。医学校は、金沢医科大学、金沢大学と名を変え現在に至る。最初に建てられた病院と医学校の校舎は木造で、レンガ積み基礎であった。その後コンクリート造の建物に変わり、最終段階をむかえている現在の病院地区工事では大きく建物配置が変わったため、歴史的にも敷地利用の大きな転換期となった。

ゴミ穴はそこに住んだ人々の活動の様子を映し、ゴミ穴の数や掘り方からゴミの性格まで見えてくる。病院地区では大量の医療関連遺物が見つかっている。診療器具、薬瓶などとともに大量の給食器が出土した。度々の一括廃棄のために何か所も掘られた給食器の詰まったゴミ穴は、宝町キャンパスを分つ医学類地区では見つからず、病院と学校では廃棄場所がきちんと分かれていたことがわかる。ゴミ穴は通常空き地に掘られる。敷地内に建物跡が見つからない場合でも、ゴミ穴の場所から建物の位置や入口を想像することができる。また、一括して捨てられたゴミを分析してみると、その時点で同時に使われていた品々が当時の生活の一端を語ってくれる。考古学的にはゴミ穴はタイムカプセルとして、まさに宝の山である。

ゴミ穴から大量に出土した陶磁器

病院の給食器

出土した給食器には、「金沢醫院」「金沢医科大学、附属医院」「金沢大学」などのロゴが記されている。このロゴから、「金沢醫院」は大正11年、「金沢医科大学、附属医院」は大正12年から昭和24年までに注文生産された品であることを読むことができる。

器種は碗皿に丼や鉢、段重、しゃもじと多種多様である。土鍋の出土も多く、大小のみならず産地の異なる鍋が、使い込まれた状態で出土した。市販の器に朱で大学名を書いたものもあり、文字のない同じ文様の器もそれなりの量で出土することから、名入ではない給食器も大量に使用されていたことがわかる。

ロゴのある注文生産品は硬質陶器である。ヨーロッパで磁器の代用品としてつくられた硬質陶器は、丈夫であるため日本でも金沢の日本硬質陶器が明治41年に創業した。現在のニッコー株式会社である。大正11年には後の井出製陶も生産を開始しており、焼き物産地として、このような形で発展し花開いていることが注目される。

「魚半」の名入り皿

「魚半」は昭和50年代末まで香林坊にあった料理屋で、創業明治30年という。名入りの器は、病院敷地内の数か所の大きなゴミ穴に大量に廃棄されており、意図的に一括廃棄したものと考えられる。病院と大学では給食があったが、外部業者に賄を委託した時期があり、その頃に使用された器の可能性がある。出土するのは皿が主であるが、碗の受け皿や丼もある。

大学名入りの給食器や業者名の書かれた器以外に、無銘の一般的な丼や皿もまとまって出土している。

用途不明の器具

大学と病院では多種の医療関連器具が発見された。多くはガラス製であるが、陶器製の見慣れない用途不明の器具も出土している。この丸みを帯びた体に二つの口を持つ器とその付属品であると思われる管は、削り跡や型合わせ跡が残り雑な作りである。しかしながら管も器も内面まで施釉されており、何らかの液体を入れたものであることが分かる。戦時中には資源が不足して、金属製の品は陶磁器で代用品を作った時代があった。この器も出土は多くないので、特殊な液体を入れた代用品の専用容器であろうか。

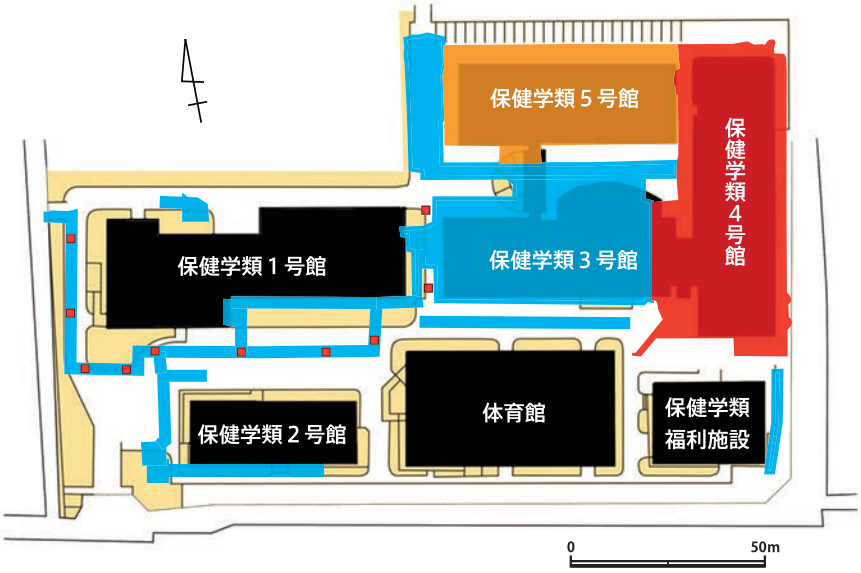
金沢監獄のあった鶴間キャンパス

鶴間キャンパスの発掘調査で特記すべきことは、荘厳強固なレンガ作りの門に代表される金沢監獄の建物基礎がきれいに出土したことである。金沢監獄は明治40年（1907）に造られ、奈良、長崎、千葉、鹿児島とともに明治の五大監獄と呼ばれる。レンガ造りの高い塀で敷地は囲まれ、近代的で当時の流行を取り入れた装飾を加えたレンガ造りの正門があった。大正11年（1922）に「金沢刑務所」と改称され、昭和45年に新築移転するまで施設は使われていた。

金沢刑務所の跡地は、金沢美術工芸大学と金沢大学保健学科（現・保健学類）とで二分した。現在の金沢美術工芸大学の門の辺りにかつての金沢監獄の正門があり、この正門は現在、愛知県犬山市の明治村に移築保存されている。美術工芸大学側の敷地には主に監獄の事務所棟や職員住宅が置かれており、金沢大学側には五翼放射状舎房や作業場があった。発掘により、中央監視所基礎の半分と5方向にのびる舎房のうちの３方の建物基礎、作業工場の一部が確認された。この中央監視所、舎房の一部も明治村に移築されているが、建物基礎部分は地面下に残されていた。この五翼放射状舎房は少人数でも監視しやすい建物であるという利点があり、網走監獄でも明治45年に採用された。

病院地区と同様に、監獄や刑務所で使われた給食器が多数出土した。器種は病院より少なく限られるが、病院と同じ硬質陶器の製品である。監獄時代と刑務所時代では器種にほとんど変化が見られないが、器面に書かれている「監」と「刑」の字によって、器の生産年代を知ることができる。そのほかに監房の木製ドア、房内の洗面台といった特殊な出土品もあった。

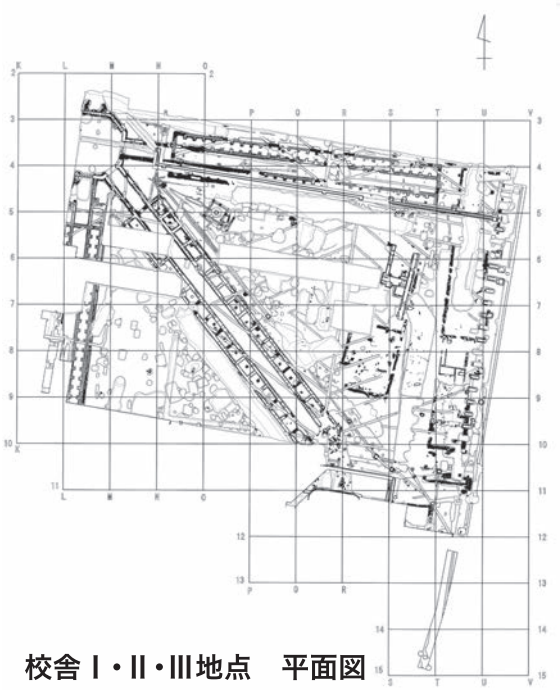
江戸時代には足軽組地や弓場であったことが絵図からわかり、日常生活用品を主とする江戸時代の陶磁器も多数出土した。監獄や大学といった後の造作により、江戸時代の遺構はかなり壊されていた。しかしながら、井戸や溝、生活にともなう土坑が発見され、出土遺物から与力同様に足軽の生活の一端ものぞくことができる。



鶴間キャンパス調査地点

- 校舎Ⅰ地点（KTH9801）
- 校舎Ⅰ基盤整備・校舎Ⅱ地点（KTH9902）
- 校舎Ⅲ地点（KTH0103）

五翼放射状舎房のレンガ積み基礎



校舎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地点　平面図

出土した居房の扉

明治村や網走監獄に移築された建物で、居房の様子を知ることができる。上部のスリットは監視用のもの、下部の四角い孔は食事を差し入れるためのものという。

監獄と刑務所で使用された器

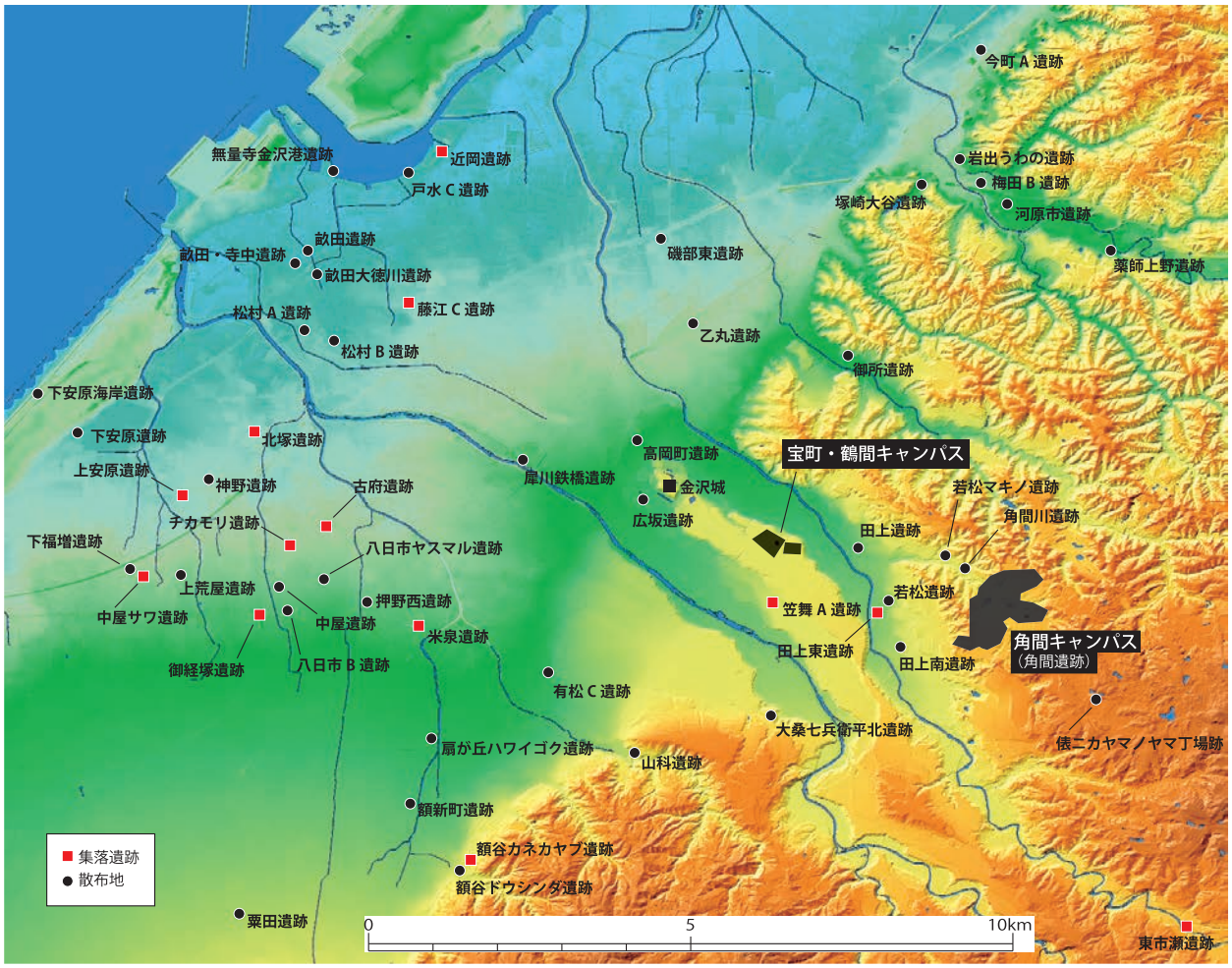
丼、碗、皿などの食器が出土した。丼や蓋では「監」や「刑」の文字が高台内にあり内面は無地のものが多いが、見込み中央に「監」の字がある器の高台内には「硬陶」の印があり、日本硬質陶器の製品であることがわかる。日本硬質陶器は明治41年に創業しており、監獄の呼称が使われなくなるのは大正11年であることから、日本の硬質陶器の歴史上、創始期の製品であるという貴重な証拠を持つ遺物である。

縄文時代の角間キャンパス

はじめに

金沢大学の角間キャンパスの地下には多くの埋蔵文化財が眠っており、角間遺跡と呼称されている。この角間遺跡の南西に位置する第2調整池南地点で縄文時代の遺構、遺物が出土している。当地点は開析が進んだ複雑な地形上に立地し、南側では小立野台地及び浅野川が望め、また戸室山及びキゴ山が遠望される。

角間遺跡の周辺には縄文遺跡が点在する。近接して角間川遺跡（早期、中期）、田上遺跡（早期、晩期）があるほか、前期の上安原遺跡、中期の北塚遺跡、古府遺跡、後期の河原市遺跡、晩期の近岡遺跡、磯部東遺跡がある。このほか後期、晩期を中心に環状木柱列が見つかったチカモリ遺跡や米泉遺跡、集落遺跡である中屋サワ遺跡、御経塚遺跡が著名である。



縄文時代の遺跡分布図
［国土地理院 数値地図5mメッシュ（標高）を使用、位置情報は奈良文化財研究所 遺跡データベースより］

第２調整池南地点の発掘調査風景

角間遺跡第2調整池南地点の発掘成果

当地点では、裾野都に近い緩斜面部に土壙24基（うち屋外炉3基）、柱穴3基を検出した。また、調査区北部の斜面において、尾根斜面に扶り込むような谷部分で遺物の集中部を確認した。

縄文土器は、縄文時代の前期から後期の土器が出土しているが、とくに縄文時代の中期前葉の新保式（約5,300年前）に比定されるものが多い。おそらくこの時期が中心になると考えられる。

また、中国地方、近畿地方を中心とし西日本に広く分布がみられる鷹島式の特徴をもった土器片が出土しており、地域間の交流を示している。

○出土土器（新保式）

○出土石器

古代の角間キャンパス

はじめに

角間遺跡では、埋蔵文化財調査センターが調査した一乗寺跡地点と第2調整池南地点から古代の遺構、遺物が多く出土している。両地点は角間遺跡の南西部分に、150mほど離れて谷を挟んで立地し、大きく開析された複雑な地形上で、支谷に挟まれた突出部上にそれぞれ位置する。また南東に医王山を望み、田上、二俣、富山市坂本を結ぶ、いわゆる「二俣越え」と称される古道沿いにある。

古代の遺跡では、平野部に奈良時代の寺院跡と考えられている広坂遺跡、東大寺の荘園であった上荒屋遺跡が著名な遺跡として知られている。また金沢市の南部に広がる丘陵には、山林寺院跡と考えられている三小牛ハバ遺跡がある。

角間遺跡一乗寺跡地点の発掘成果

○調査の結果

掘立柱建物跡、炉跡、礎石、柵列跡などの遺構が確認され、古代から中世の土師器、須恵器、灰釉陶器（猿投窯）、緑釉陶器、青磁水注（越州窯系）、青磁（龍泉窯系）などの遺物が出土した。こうした遺構、遺物の内容から当地点を山間寺院跡と推定している。

当地点より南東に望む医王山は、白山と同じく泰澄によって8世紀前半に開山されたといわれており、当地点にあったと考えられる山間寺院も修験道と深く関わりをもっていたと推察される。

○越州窯系青磁水注

形態や色調、焼成などの特徴から中国浙江省にある越州窯系の青磁水注と考えられる。日本で越州窯の青磁が出土することは稀であり、当該寺院が中央の朝廷と結びついた有力な立場にあった可能性を物語る。

○耳皿

耳皿は口縁の両側が折れていて、耳の形に類似していることから、そう呼ばれている。一般的には、上流階級の食事や祭祀の際の箸置きとして使用されたものとされているが、本資料は口縁の折れが弱いことと、内面を黒色処理しているため、別の用途も考えられる。

○墨書土器

墨書土器とは、文字や記号、絵などを墨で書き記した土器をいう。古代を中心に、祭祀儀礼に関わるものが多く、当時の信仰や慣習などがうかがえる資料として重要である。

左上と右上は胴部外面に横位の「一乗」が書される。左下は高台内に「寺」、右下は胴部外面に横位の「寺」が書される。

この「一乗」とは仏教用語で、いっさいの衆生を成仏させる最上の教法とされ、とくに妙法蓮華経に顕著にあらわれるものである（参照：『旺文社古語辞典』1987）。

角間遺跡第2調整池南地点の発掘成果

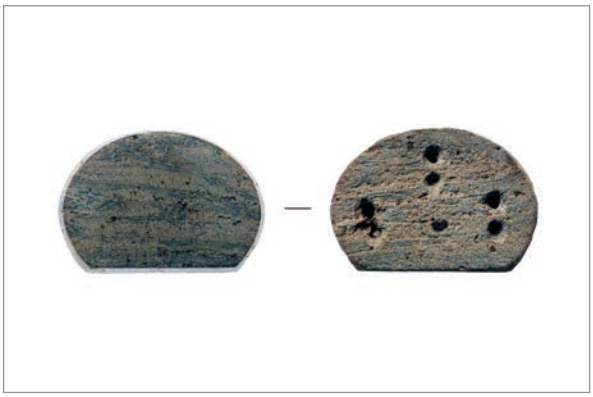
○方形周溝状遺構

古代および中世の遺構は方形周溝状遺構、大型柱穴列、焼土跡、柵列などを検出した。方形周溝状遺構は中央に土壙をもち、周囲を溝で方形状に区画し、溝区画内を掘り窪めて貼床を構築している。またこれに伴うと考えられる柱穴を検出し、上屋の存在が想定できる。こうした点から当該遺構が埋葬施設である可能性は高い。

なお遺物の検討から、一乗寺跡地点の盛行期と当該遺構の形成は同時期に比定される。両地点の遺構と遺物は加賀における古代の信仰を考えるうえで重要な資料となろう。

○ガラス製玉

方形周溝状遺構の溝区画内の東側貼床面から出土した。青色を呈する小玉で、直径1mmの孔があけられている。



○石帯

方形周溝状遺構の溝区画内の北側貼床直上の覆土より出土した。滑石製で表面はよく磨かれ、三ケ所に一対の穿孔が認められる。

おわりに

発掘調査によって得られた遺構、遺物から、古代の角間遺跡には寺院があった可能性は高い。また越州窯の水注が出土しているが、これは国内でも数えるほどの例しかない。当寺院が地域で重要な役割を担っていた証拠であり、さらには角間の地が昔から学問の府として機能していたことを想わせる。

資料館×埋蔵文化財調査センター
平成27年度 特別展

加賀藩 与力

武士のほまれ

開催期間：平成27年10月1日（木）～11月11日（水）
編集・発行：金沢大学資料館
発行日：平成27年10月1日
印　刷：能登印刷株式会社